

神戸高商と高畑誠一翁

経済学博士 桂 芳男



今夏の酷暑は余りにも異常すぎた。神戸高商卒の鈴木商店OBロンドン会の重鎮、宮口俊二郎氏（第七回卒）や小野三郎氏（第九回卒）が相次いで急逝された。そして、この九月十九日にはついに『鈴和会』（旧鈴木系企業親睦団体）および『辰巳会』（鈴木OB個人親睦団体）の総師、高畑誠一翁が急逝されたのである。

高畑翁は明治二十年三月二十一日に、当時木嶋で栄えた内子町（愛媛県）に生まれた。この町は松山から大洲への古街道沿いに発達した町で、三方の溪谷を削って流れ落ちてくる三つの川がつくった盆地の中にある。翁は健康上の理由もあって西条中学を経て神戸高商へ入学されたのであった。当時開校後間もないこの神戸高商は、水島鏡也校長を総師とする『茸合村塾』として、実業家養成のためのユニークな校風を築きつつあった。

翁は第三回の卒業（明治四十二年三月）である。同期には盟友の永井幸太郎翁をはじめ、出光佐三翁や和田帷輔翁がおられた。佐々木義彦氏や藤原正次氏は一年先輩であったが、後輩には、前述の宮口、小野両氏のほか北浜留松氏（第四回卒）や小川実三郎氏、寺崎栄一郎氏（第六回卒）などが続いた。翁は北浜留松氏とともに『語学部』に属し本科三年のときには和田帷輔翁らとともに……『特待生』に推されている。翁の卒論は『大日本主義論』と題される上下合わせ

て六〇〇枚に及ぶ大作であった。それは、当時の津村秀松教授が『専攻部の論文』としても通用するものとして激賞された力作であった。翁はそこで炯眼にもすでに当時のわが国の『農業保護主義の不得策・不可能』を指摘し『商工立国たらざるを得ざるは現今の小日本の運命なり』と喝破されたのであった。

卒業式るとき、翁は卒業生を代表して『校長報告の次第を外国来賓に告ぐべく英語にて訳述する』といった大任を果たされたのであった。そのとき、来賓演説のため松方幸次郎川崎造船所所長が来席されていたことは、翁の将来にとって甚だ運命的な出会いであったといわねばならない。

翁は『三井物産』志望であったが畏敬する水島校長のたつての勧めで地元の新興商社『鈴木商店』へ入店されたのであった。出光翁も鈴木志望であったが地元の酒井商会へ入店された。永井翁は紐育スタンダード石油（敦賀）に入社されたが、半年後に高畑翁の勧めで鈴木へ移れることとなるのである。鈴木へはすでに一年先輩の小牧（松原と改姓）清三氏が入店していた。翁は入店後早くも三年有余でその才覚を認められ総師金子直吉の大方針のもと当時の世界の貿易・金融の中心地ロンドンへ派遣されることとなった。大正二年一月三十一日付の翁の書信はいう。『小生今回倫敦出張所へ転任致す事と相成愈々来月三日午後九時十三分三宮駅発の列車にて朝鮮西比利亜經由赴任仕候。』ロンドン着任後の翁の大活躍の詳細については、拙著『総合商社の源流・鈴木商店』（日経新書）に譲るが、それはまさに母校校歌『商神』の権化というに似つかわしいものであった。翁の『三國間貿易』の着手、マーチャント・バンカー筋その他からの情報収集活動、大英帝国政府および連合国からの軍需食糧品の大量引き合いの成功……は、

第一次大戦景気を背景とするいわば大正版『黄金の日々』の時代に、鈴木商店を世界的大商社として雄飛せしめる大原動力となるのである。そして、大正七年に母校教授を辞任し久原の重役室に納った津村秀松博士をして『商売のコツ』を教え子の『高畑から教わりたい』と羨望せしめたのであった。

鈴木時代の高畑翁については『貿易王』としての活躍のほか、それに劣らず重要な側面がある。例えば、翁が進んで移植導入された当時の新産業『合成硫酸』（クロード式窒素工業）は今日の巨大装置産業の基礎を築くものであった。第二に、Kラインの運行その他で発揮された翁の海運オペレーターとしての卓越した手腕。第三は、わが国ゴルフ界の幕分けとしての活躍。大正十年に訪英中の皇太子（昭和天皇）に世界一流プレイヤーによるエキジビションマッチ・プレーを御覧に供されたことは余りにも有名であるが、本場仕込みの翁のキャリアは昭和七年アリソン設計の広野ゴルフ場の建設に結実するのである。第四は、翁が松方コレクションに協力され海外流出の浮世絵の収集でわが国の文化遺産の保存に貢献されたことである。

第五は、翁の積極的な同窓会活動である。翁は学友会の活動的な常議員でもあった。『神戸高商同窓会倫敦支部が彦坂八三郎氏（野沢組）たち三名によって発足したのは、大正元年十月二十五日のことであった。翁は翌年四月中旬にその第五番目のメンバーとして着英の歓迎をうけられたのであった。そして、大正十五年の帰国まで中心的メンバーとして活躍され、『支部』もミンシングレーンの鈴木商店内におかれることとなったのであった。

ちなみに、盟友永井翁が着英の歓迎をうけられたのは大正三年一月十日であったが十二月末に帰国の途につかれています。

翁の同窓会活動の中で特筆すべきことは、大正七年に火を噴いたあの母校の商大昇格運動への積極的な参加であろう。この昇格運動は母校開校二十周年目の大正十二年三月に当該予算の『両院通過』によってその悲願を達成するのであるが、その間『商大問題掘金』において大正九年に鈴木商店は三井合名とともに筆頭の十万円を拠出している。翁も個人の部で二十口の巨額を拠出されているのであるが、さらに大正十一年十月八日には同窓会ロンドン支部を代表して、商大問題について本国政府の総理・大蔵・文部の三大臣に対してつぎのような劇的な請願電文を打電されたのであった。

ここにひとつのエピソードがある。商大昇格への扇港財界あげての熱望が盛り上がる中で、松方幸次郎は不人気な反対意見を表明して世の注目を浴びた。松方の盟友金子直吉は積極的賛成派を代表し『第一に政府に対して充分主張し次いで神戸市の有力者と合議して直接に間接に大いに援助する考え』を表明。

また、『大学は必ず私学ならざるべからずと信じた』武藤山治さえも『姉妹校たる東京高商が大学たる以上は同じ人大学たるべきものなり』との見解を表明していた。これに対し松方は『神戸高商を大学にするなどの必要は少しもござせん』と放言したのであった。

ところが、松方の真意は頗るイノセントなものであった。それはほかでもなく、松方がロンドン滞在中眠前にした当時の若き高畑翁の『商神の再来』を思わせるようなあの大活躍に起因していたのであった。つまり、松方はそこで甚だ逆説的に『支配人は高商出をもって最も適任とす』と確信したというのであった。